

危機方言合同発表

2019.03.10@国立国語研究所

# 淡路方言の活用とアクセント単位

中澤 光平

国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員

k.nakazawa[at]ninjal.ac.jp



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

# 本発表の目的

淡路方言の活用における音韻語 (Phonological word) と文法語 (Grammatical word) の不一致を中心に「語」の認定基準について考察する。

# 発表の構成

1. 淡路方言について
2. 淡路方言のアクセント体系
3. 淡路方言の活用
4. 語の認定基準について
5. まとめと課題

# 発表の構成

1. 淡路方言について
2. 淡路方言のアクセント体系
3. 淡路方言の活用
4. 語の認定基準について
5. まとめと課題

# 1. 淡路方言について

- 兵庫県南部の淡路島（と沼島）で伝統的に話されている言語の総称。
- 近畿方言的な特徴と中国四国方言的な特徴を併せ持つ。
- 淡路島の面積は592.17平方キロメートル。人口は約15万。3市からなり、北から淡路市，洲本市，南あわじ市。各市の人口は5万人程度。

# 1. 淡路方言について

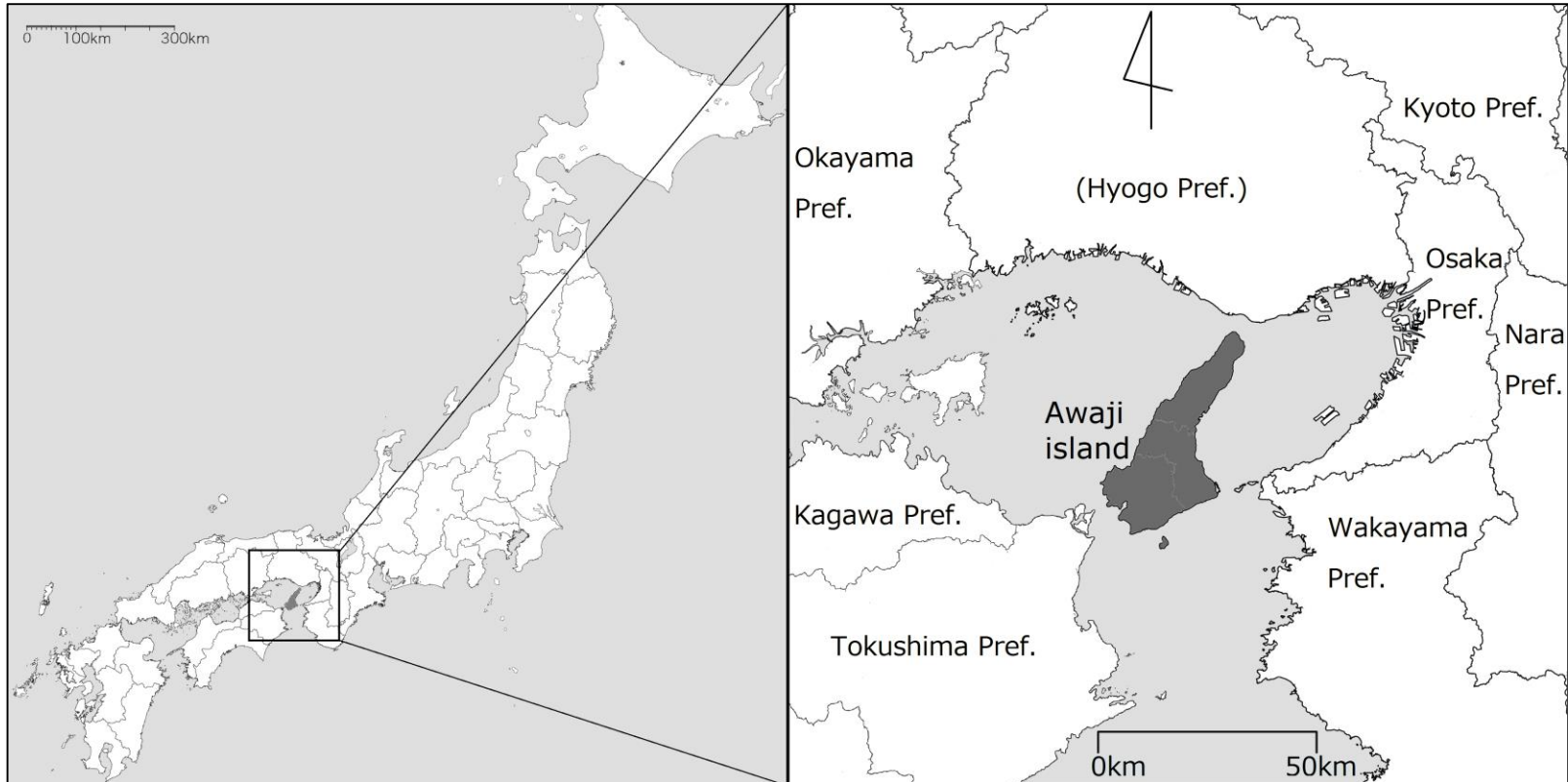


図1 淡路島の位置

# 1. 淡路方言について

- 「国産み神話」でイザナギ, イザナミが生んだ8つの島(本州、四国、九州、佐渡島、隠岐島、対馬、壱岐島、淡路島)のうち最初に生まれたとされる。(国産みの舞台オノゴロ島は淡路島南の離島沼島または沼島にある巨岩の上立神岩との説あり)
- 「踵」を意味するキキビソが淡路全島に分布しており, 古語クヒビスがクビス(>キビス)に転じる前に淡路方言が分岐, 成立したか。

# 1. 淡路方言について

- 淡路方言の特徴には次のようなものがある。
- 濁音の前鼻音が/g/, /d/に見られる。<sup>[6]</sup>
- オモツショイ<面白い, トツショリ<年寄り, ヒンネ<昼寝など促音化, 撥音化が多い。<sup>[5]</sup>
- 「が」・「は」が前の語と融合する。<sup>[5]</sup>
- 一段動詞の五段化が見られる。<sup>[1][6]</sup>
- 「ヨル」と「トル」の区別がある。<sup>[1]</sup>



# 1. 淡路方言について

近畿方言的な要素と中国四国方言的な要素を持つ。

(近畿方言的)

- コピュラ「ヤ」の使用 (GAJ36図)
- 順接接続助詞「サカイ」の使用 (GAJ37図)

(中国四国方言的)

- とりたて詞「バー」の使用
- 疑問詞と条件形の「係り結び」 (GAJ260図)

# 1. 淡路方言について

- 否定(極性), 態(ヴォイス), 相(アスペクト), 時制(テンス)などは接辞によって示される。

*tabe-ru, tabe-N, tabe-rare-ru, tabe-yor-u*

*eat-NPST, eat-NEG, eat-PASS-NPST, eat-PROG-NPST,*

*tabe-ta, tabe-rare-yot-ta*

*eat-PST, eat-PASS-PROG-PST*

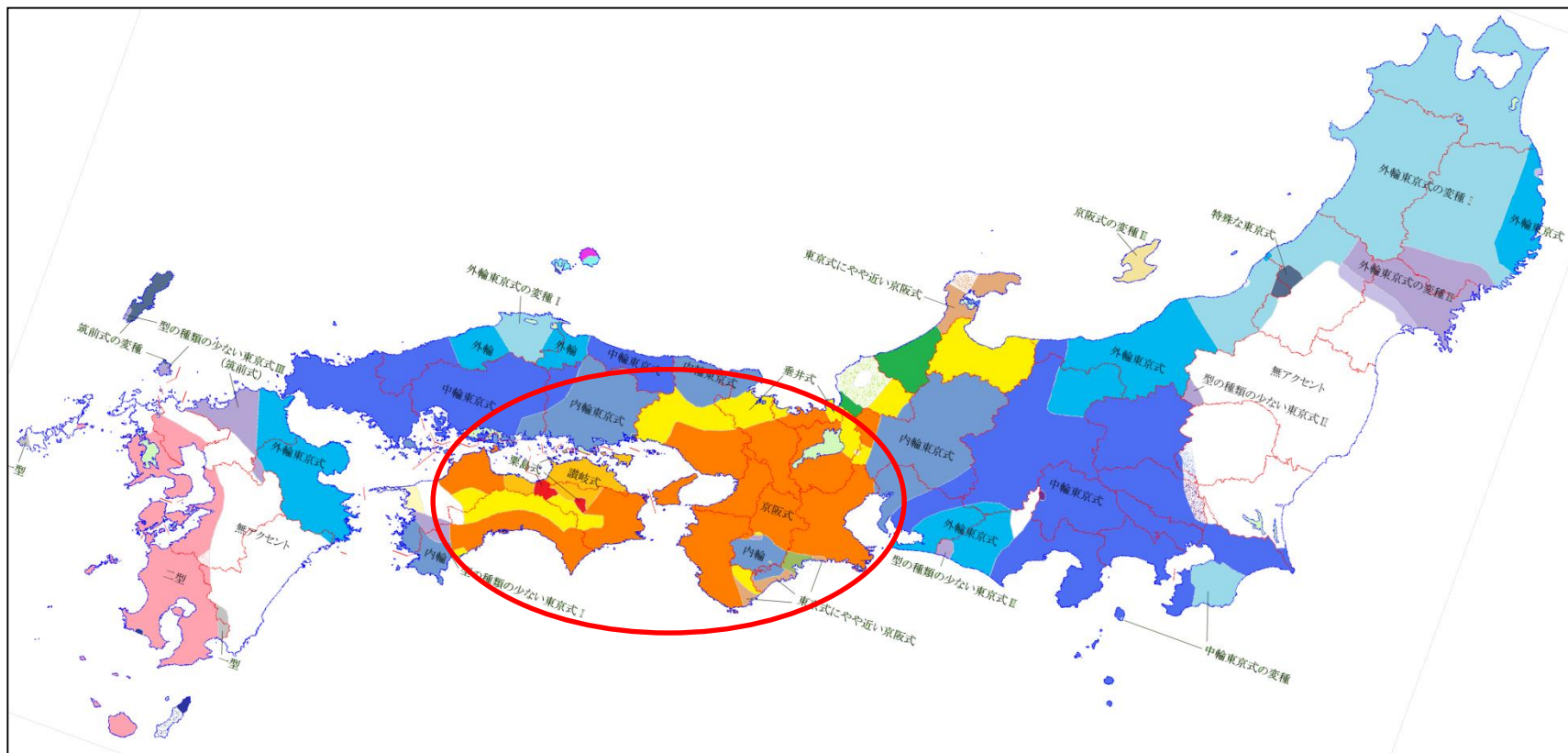
# 発表の構成

1. 淡路方言について
2. **淡路方言のアクセント体系**
3. 淡路方言の活用
4. 語の認定基準について
5. まとめと課題

## 2. 淡路方言のアクセント体系

- 京都や大阪と同じ「中央式」に属する。<sup>[2]</sup>
- 「讃岐式」や「真鍋式」と同様に、2つの式音調（アクセント単位全体のピッチを支配）と「核」（局所的にピッチを変化）からなる。<sup>[7]</sup>
- 淡路方言は「高起式」と「低起式」の2式および下げ核を有する。
- 高起式・・・文節を高く始める。
- 低起式・・・文節を低く始める。
- 下げ核・・・モーラ間で高から低へ下げる。<sup>[4]</sup>

# 日本語諸方言のアクセントの分布



Wikipedia「日本語方言のアクセント」より加工

## 2. 淡路方言のアクセント体系

### (1) 高起式

a. HH, HHH, HHHH, HHHHH, ... H0

b. HL, HLL, HHL, HLLL, HHLL, HHHL, ... Hk (H1, ...)

### (2) 低起式

a. LH, LLH, LLLH, LLLLH, ... L0

高起式文節が後続する場合は低平調に:

LL#H..., LLL#H..., LLLL#H..., ...

b. LF, LHL, LLF, LHLL, LLHL, ... Lk (L2, L3, ...)

## 2. 淡路方言のアクセント体系

- (1a)は全体が高く音調の下がり目がない型で、「H0」と表す。(Hは高起式を, 0は下がり目がないことを表す)
- (1b)は「Hk」と表す。「k」は下がり目があることを示す。
- H1 は HL, HLL, HLLL, ... を表す。
- H2 は HHL, HHLL, HHLLL, ... を表す。

## 2. 淡路方言のアクセント体系

- 同様に、(2a) と (2b) はそれぞれ「L0」、「Lk」と表される。
- 低起式は (FもHとして扱えば) Hをただ1つ含むことになる。

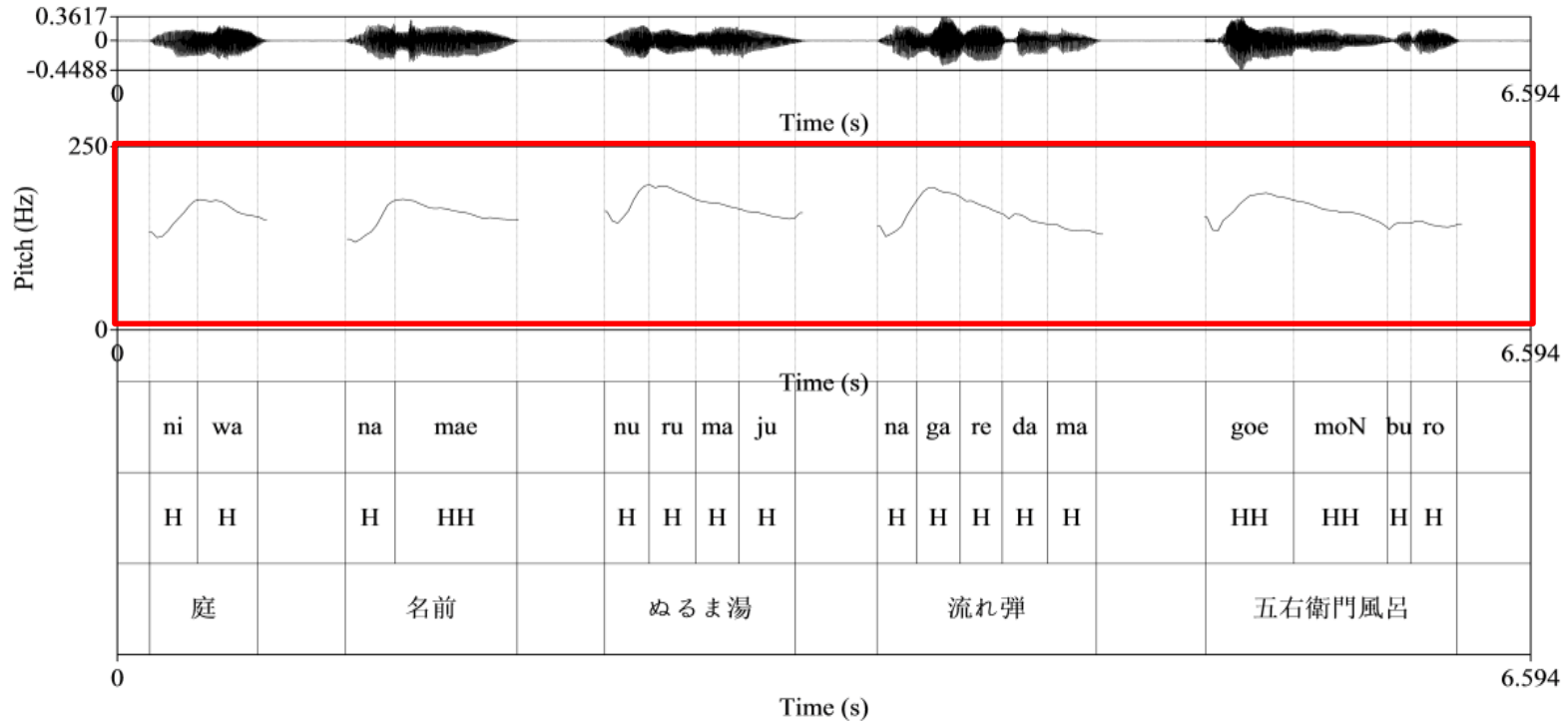
L0 (LH, LLH, LLLH, LLLLH, ...)

Lk (LF, LHL, LLF, LHLL, LLHL, ...)

※L0のHは高起式の文節が後続すると消えることに注意。

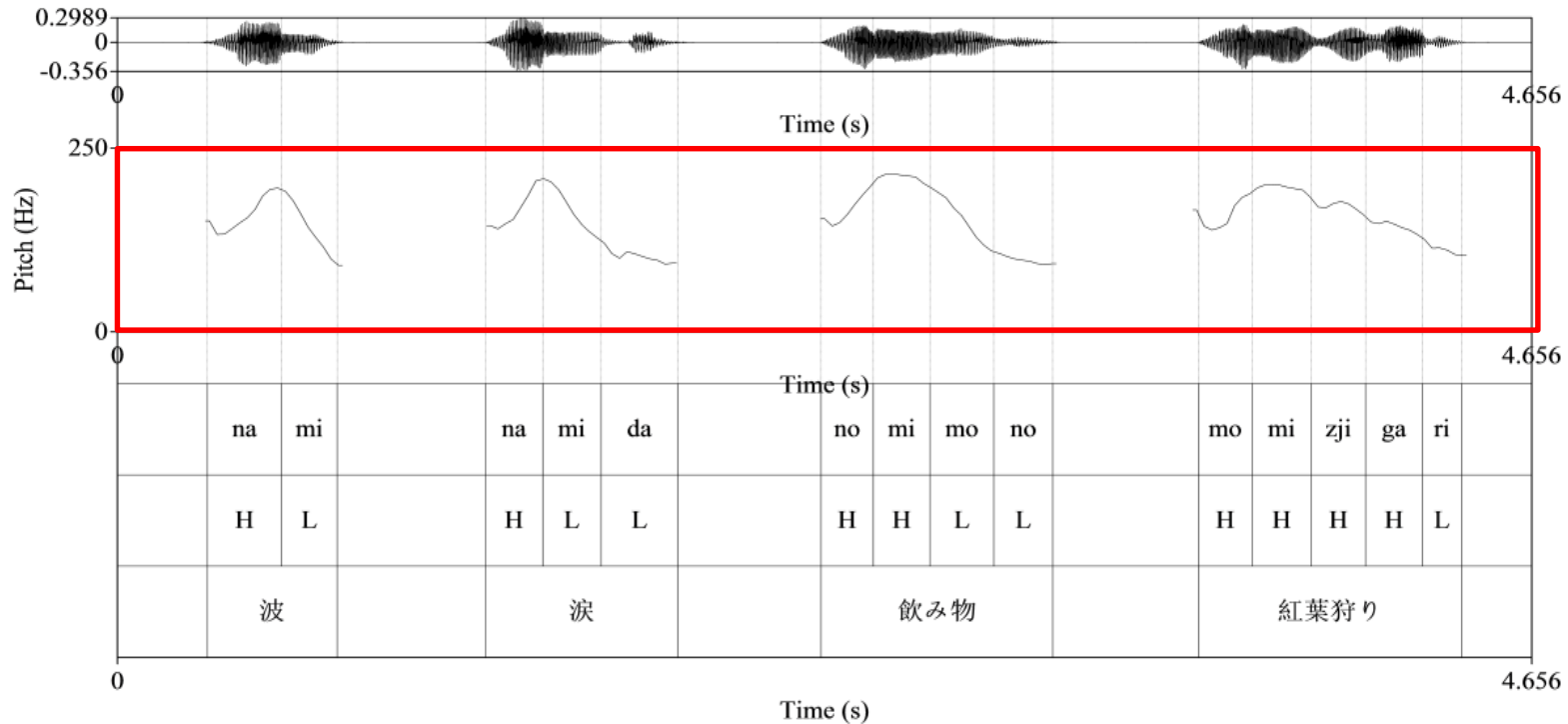


## 2. 淡路方言のアクセント体系



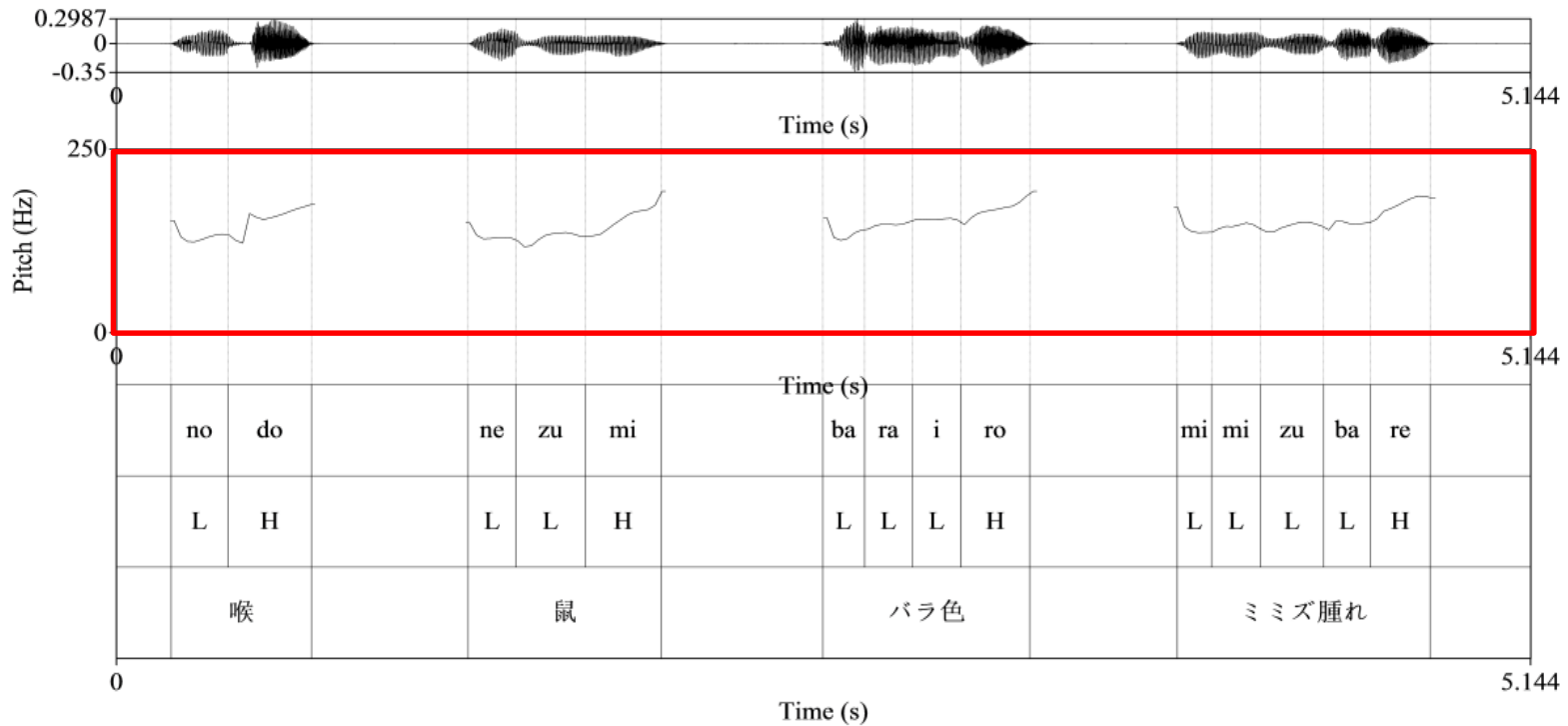
H0のピッチ曲線

## 2. 淡路方言のアクセント体系



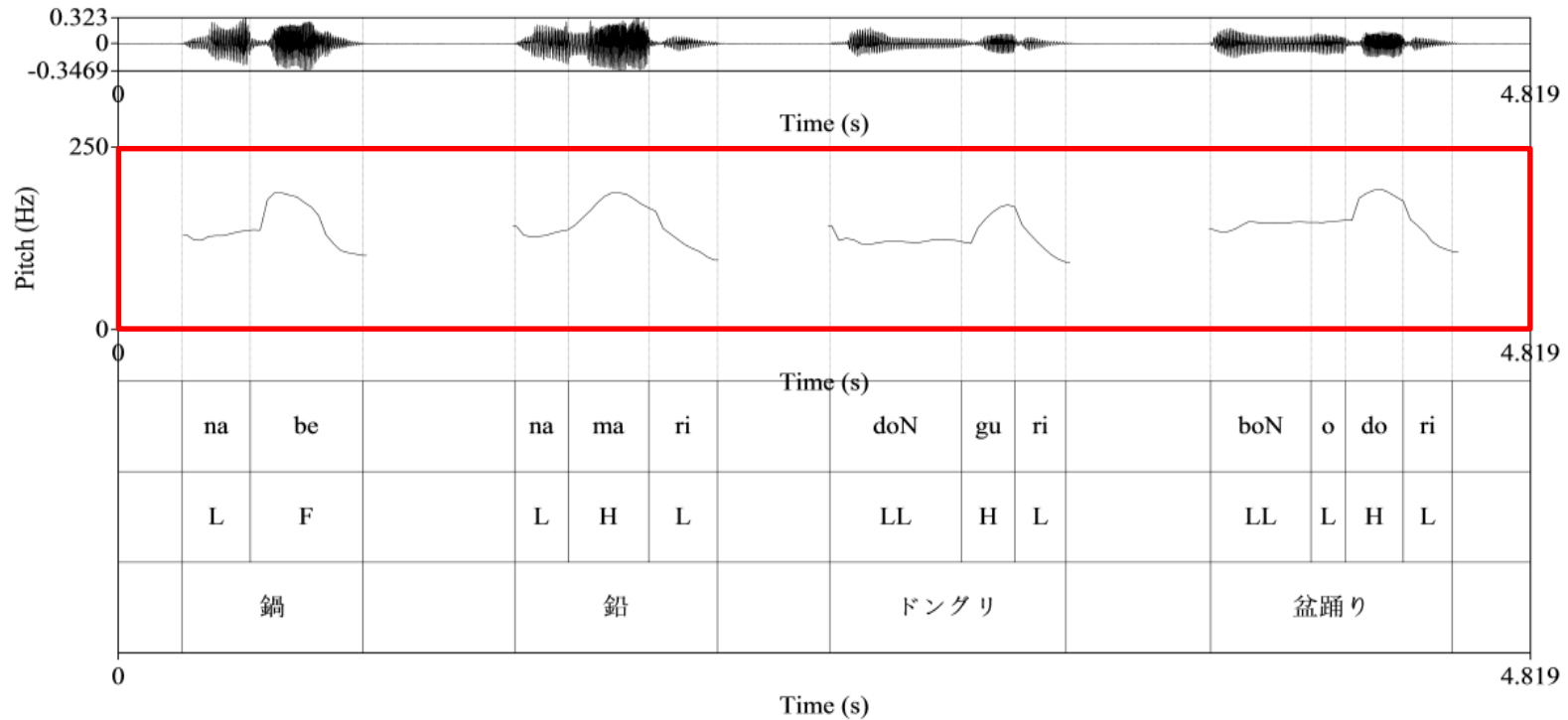
Hkのピッチ曲線

## 2. 淡路方言のアクセント体系



L0のピッチ曲線

## 2. 淡路方言のアクセント体系



### Lkのピッチ曲線

## 2. 淡路方言のアクセント体系

- 1アクセント単位はH0, Hk, L0, Lkのいずれかになる。自立語は通常1アクセント単位をなす。

(3) a1.	mízú	írò	hàrí	sàrû	
	水	色	針	猿	
a2.	kódómó	cíkàrà	átámà	nèzùmí	hàsírà
	子供	力	頭	鼠	枕
a3.	mízú=gá	írò=gà	hàri=gá	sàrú=gà	
	水=NOM	色=NOM	針=NOM	猿=NOM	

## 2. 淡路方言のアクセント体系

- (3) b1. ní-rú      ór-ù      mì-rú      kàk-ê  
煮る      居る      見る      書け
- b2. ódór-ú      hásir-ù      ní-tór-ù      tàbè-rú  
踊る      走る      煮ている      食べる
- tàbé-tà  
食べ-た
- b3. ní-rú=tó      ór-ù=tò      mì-rù=tó  
煮る=と      居る=と      見る=と

## 2. 淡路方言のアクセント体系

- 接辞や(一部の)接語は音韻的に自立しておらず、アクセント単位を形成しない。音韻語を「アクセント的に自立する単位」と考えた場合、接辞や接語を含む文節全体を音韻語と見なす必要がある。

音韻語

自立語-接辞

音韻語

自立語=接語

## 2. 淡路方言のアクセント体系

- (1), (2)のH0, Hk, L0, Lkのいずれの1アクセント単位形でも解釈できない音調が現れた場合は, 2単位(以上)の組み合わせと解釈する。



## 2. 淡路方言のアクセント体系

- H音調の間にL音調が割り込んでいる場合, 2つ(以上)のアクセント単位に分割される。

(4) HLHLL → HL+HLL (H1+H1),

HHLHH → HHL+HH (H2+H0),

LLHLH → LLH+LH (L0+L0)

## 2. 淡路方言のアクセント体系

- L音調の後にH音調が複数続く場合も複数のアクセント単位に分かれる。

(5) LLHHH → LL + HHH (L0+H0),

LLHHL → LL + HHL (L0+H2),

LLLHH → LLL + HH (L0+H0)

## 2. 淡路方言のアクセント体系

- 複数のアクセント単位に分かれることはわかっても、どこで分かれるかはっきりしない場合もある。

(6) HLLHL → HL+LHL or HLL+HL  
HHLHL → HH+LHL or HHL+HL  
LHLLH → LH+LLH or LHL+LH  
LHLHL → LH+LHL or LHL+HL

# 発表の構成

1. 淡路方言について
2. 淡路方言のアクセント体系
- 3. 淡路方言の活用**
4. 語の認定基準について
5. まとめと課題

### 3. 淡路方言の活用

- 淡路方言は動詞の屈折にも派生にも接辞を用いる。
- 代表的な屈折接辞には(7)がある。

(7)	a. 非過去 <i>-ru</i>	[tàbèrú]	L0	「食べる」
	b. 条件 <i>-rya</i>	[tàbérjà]	L2	「食べれば」
	c. 禁止 <i>-na</i>	[tàbénà]	L2	「食べるな」
	d. 命令 <i>-e</i>	[tàbéè]	L2	「食べろ」
	e. 意志 <i>-o</i>	[tàbèjó]	L0	「食べよう」
	f. 副動詞 <i>-te</i>	[tàbèté]	L0	「食べて」

### 3. 淡路方言の活用

- 屈折的接辞

- (8) a. 過去 *-tar* [tàbétà] L2
- b. 否定(1) *-N* [táběN] L0
- c. 否定(2) *-heN* [tábêhéN] L2+H0  
~ [tábéhèN] L2
- d. *-N + -tar* [tábénàndà] L2
- e. *-heN + -tar* [tábêhénàNdà] L2+H1  
~ [tábéhènàNdà] L2
- f. *-N + -tar + -rya* [tábénàNdàrà] L2+H1(?)  
~ [tábénàNdàrà] L2

### 3. 淡路方言の活用

- (8)では2単位形が現れるが、(8f)のLHLLHLは2単位に分かれることは分かっても、LH+LLHL, LHLL+HL, LHL+LHLのいずれに分けるべきかははっきりしない。

tà**bé** + nà**ndára** or

tà**bénàn** + **dára** or

tà**bénà** + **ndára**

### 3. 淡路方言の活用

- 派生接辞は屈折接辞とともに用いることができる。派生接辞同士も共起できる。

(9)	a. 使役 <i>-sas-</i>	tàbè-sàs-ú L0
	b. 受身 <i>-rare-</i>	tábé-ràrè-rù H3
	c. 進行 <i>-yor-</i>	tábé-jòr-ù L2
	d. 可能 <i>-re-</i>	tàbè-rè-rú L0
	e. 希望 <i>-ta-</i>	tábé-tá-ì H3
	f. 丁寧 <i>-mas-</i>	tàbè-màs-ú L0



### 3. 淡路方言の活用

(9) g. 完了 *-tor-*                      *tàbè-tór-ù* L3

h. *-sas-rare-yor-i-ta-*

[*tàbèsàsàrèjòrítái*] L8

i. *-sas-rare-yor-re-mas-*

[*tàbèsàsàrèjòrèmàsú*] L0

淡路方言では動詞語根に最大で7つの接辞が後続するのを許容する。

[例] *tabe-sas-are-yor-e-masi-tar-a*

### 3. 淡路方言の活用

- 形容詞の「活用」でもアクセント単位の不一致が見られる。

(10) ナイ形 <i>na-</i>	<i>àmá+nà-í</i> L0+L0
ナル形 <i>=nar-</i>	<i>àmà=nàr-ú</i> L0
<i>na-</i> + <i>-tar-</i>	<i>àmà+nákàt-tà</i> L0+H1
<i>=nar-</i> + <i>-tar-</i>	<i>àmà=nát-tà</i> L3
<i>=mo</i> + <i>na-</i>	<i>àmá=mò+nà-í</i> L2+L0
<i>=mo</i> + <i>nar-</i>	<i>àmá=mò+nàr-ú</i> L2+L0

# 3. 淡路方言の活用

- 動詞接辞の構造は次のように整理できる。

(11)

派生接辞					屈折接辞		
-sas- (CAUS)	-rare- (PASS)	-yor- (PROG)			-e (IMP)		
					-na (PROH)		
			-re- (POT)	-mas- (HON)	-N (NEG)	-tar (PST)	-rya (COND)
						-te (CVB)	
					-ta- (DSR)	-o (VOL)	
		-ru (NPST)					

# 発表の構成

1. 淡路方言について
2. 淡路方言のアクセント体系
3. 淡路方言の活用
4. 語の認定基準について
5. まとめと課題

## 4. 語の認定基準について

- 淡路方言では動詞に複数の接辞が付くこと、また(広義の)活用では *tàbê-héN* (LF+HH) や *tàbé-nàN-dár-à* (LHLLHL) のような2アクセント単位形が観察されることを確認した。
- *-heN* と *-dar(-)a* は接辞だが固有のアクセントを有している。 (*-héN*, *-dár-à*)
- 固有のアクセントがある接辞は、統語的(文法的)には語ではないが、音韻的には語であると言える。

## 4. 語の認定基準について

- 文法化の過程は次のような連続体を成す。

(12) 語 → 接語 → 接辞 [9]

- 文法化とは名詞や動詞のような内容語が接辞や接置詞のような文法的要素に変化する過程である。接語は文法化の過程で生じた要素と考えられる。

## 4. 語の認定基準について

- (12) の文法化を経た要素は日本語にも見られる。
- (13) a. *ute* (棄て) > =*te* (clitic for “after [do]ing”) > -*te* (converbial affix)
- b. *kara* (「血族」) > =*kara* (clitic for “from”)
- c. *motte* (「持つて」) > -*motte* (affix for simultaneous)

## 4. 語の認定基準について

- (13)の要素は文法化の過程で固有のアクセントを失っている。文法化は次のように定式化できる。

- (14) [ + phonological][ + grammatical] (word)  
> [ - phonological][ + grammatical] (clitic)  
> [ - phonological][ - grammatical] (affix)



## 4. 語の認定基準について

- 一方で、**-heN と -dar(-)a** は接辞だが、固有のアクセント単位を保持している。すなわち、文法的には語ではないが音韻的には語になる。そのため、(15)のような組み合わせを考えることができる。

(15)

	phonological	grammatical	Yes	No
Yes			Word	?
No			Clitic	Affix

# 4. 語の認定基準について

- そのため, (11)以外に次のような文法化の過程を認める必要がある。

[ + phonological][ + grammatical]

> [+ phonological][ - grammatical] **stressed affix**

> [ - phonological][ - grammatical].

	grammatical	yes	no
phonological		word	?
	yes		
	no	clitic	affix

## 4. 語の認定基準について

- 新たな文法化のプロセスの例

(16) *sé-nú* (verb for do-NEG) > *-héN* (stressed affix for negation) > *-heN* (negative affix)

*tàbê=wa sé-nu* > *tàbê-héN* > *tàbê-heN*

LH=L H-H

LF-HH

LH-LL

## 4. 語の認定基準について

- 語を定義するのに音韻的な基準を用いるか文法的な基準を用いるかを決める必要がある。<sup>[8]</sup>
- しかしながら、アクセント単位を有する接辞がかかわる場合、音韻的な基準では(8f)のように境界がはっきりしない場合がある。このような曖昧性を排除するためには、語は文法的な基準に基づいて決定する方が問題が少ないと考える。

## 4. 語の認定基準について

- 語よりは統語的に自由ではないが接辞ほど拘束されていない形式を「接語」とすると、活用に関しては次のような形式が接語になる。

(17) =ka/=ke(疑問), =to(条件), =ni(目的), =na(疑問), ...

## 4. 語の認定基準について

- 一部の「助詞」はアクセント的に独立する。

(18) =*dake* (H0), =*koso* (H1), =*made* (L0), =*nado* (L2), =*yor*i (L0 or H1), =*baa* (H1 or L2), =*yotte* (H1), =*keNdo* (H1), =*sakai* (H1)  
=*rasi-* (H1), =*mitai* (H1), =*yoo* (H1), =*soo* (H1)

- さらに、「義務」を表す次の接辞を認める必要がある。

(19) -*na+naraN*, -*N+naraN*, -*NnaN*

## 4. 語の認定基準について

- アクセントを基準とすると, (17)と(18)を助詞としてまとめることができなくなってしまう。
- 語の認定は文法的(統語的)基準に基づいて行った方が無理が少ない。

音韻的	文法的	例
○	○	名詞, 動詞, 形容詞, 副詞, 感動詞, …
×	○	助詞(二, ト, カラ, モ, エ, …), =ナル, …
○	×	一部接辞(ヘン, タラ, …)
×	×	接辞

# 発表の構成

1. 淡路方言について
2. 淡路方言のアクセント体系
3. 淡路方言の活用
4. 語の認定基準について
5. **まとめと課題**



## 5. まとめと課題

- 本発表の主張をまとめる。
  1. 淡路方言は活用に接辞を用いる。
  2. いくつかの接辞は固有のアクセントを有する。
  3. 音韻的な基準（アクセント）では語の境界が一部で曖昧になることがあるため、語は文法的基準で決定した方が良い。
- 上の主張が淡路方言以外にも当てはまるか、反例（文法的基準の方が問題が多くなる）はないかなどは今後の課題である。

# 略語一覽

CAUS: 使役

COND: 条件

CVB: 副動詞

DSR: 希望

HON: 丁寧

NEG: 否定

NOM: 主格

NPST: 非過去

PASS: 受身

POT: 可能

PROG: 進行

PST: 過去

VOL: 意志

# 参考文献

- [1] 榎垣実編(1962)『近畿方言の総合的研究』東京:三省堂.
- [2] 上野善道(1987)「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42: 15-70.
- [3] 上野善道(1992)「昇り核について」『音声学会会報』199: 1-14.
- [4] 上野善道(2006)「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
- [5] 興津憲作(1990)『淡路方言－特徴・語法・アクセント・語彙』旧津名郡一宮町:兵庫県立淡路文化会館.
- [6] 高橋顕志(1982)「淡路島の方言」『講座方言学7 近畿地方の方言』: 253-276. 東京:国書刊行会.
- [7] 中井幸比古編著(2002)『京阪系アクセント辞典』東京:勉誠出版.
- [8] E. M. W. Dixon and Alexandra Y. Aikenvald. 2003. Word A cross-linguistic typology. Cambridge University Press.
- [9] Paul J. Hopper and Elizabeth Closs Traugott. 2003. Grammaticalization Second edition.

# ご清聴ありがとうございました

